

# ともに 歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔を。  
暗闇に立ちすくんだ時、  
この記録が足元を照らす光となるように。  
そしてまた明日の朝を迎えられるように。  
朝日新聞社員がつづる。

## 子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た  
子どもたちの記憶を刻みます

## 今野麻里さん「18歳」 理加さん「16歳」 大輔くん「12歳」

## 大輔くん「12歳」

間垣地区は北上川右岸  
にあった旧大川村の中央  
付近、住所名でいうと石

ちにこ馳走した。仕事の合間、工場の人み  
んなに抱いてもらったことが、当時働いて  
いた人たちの間で語り継がれている。「バブ  
ル」の名残の時代、工場も順調だった。

た。幼いころから、工場に連れられていき、  
大勢の人と接していたせいだろうか、麻里  
さんは人前でも動じない、はきはきともの  
を言う性格に育っていた。お遊戯会など、  
どこでも目立つ子どもだ。

「大川村誌」によると、大正、昭和の河川  
改修の後、大川中学校が新設されてから集  
落として発展を見せたという。

麻里さん誕生の翌々年、理加さんが生ま  
れた。その4年後、大輔くんが生まれた。  
男の子の誕生は浩さんをさらに喜ばせ、初  
孫のときに行う「孫振る舞い」を再び開い  
たほどだった。

一学年下の理加さんはやや内気で、お姉  
ちゃんの後にかくれている感じだが、負け  
ず嫌い。姉二人はピアノを習い、仲良く二  
人で連弾していた。末っ子の理加くんが大  
きくなると、二番目の理加さんとはけんか  
が絶えなくなる。几帳面な理加さんの部屋  
を大輔くんが散らかすと理加さんは怒り出  
し、なだめ役は長女の麻里さんだった。

石巻・渡波地区出身のひとみさんは針岡  
に嫁いだ姉のもとをよく訪ねていた。親戚  
の紹介で今野浩行さんと知り合い、91年に  
結婚。翌年、麻里さんが生まれた。

やがて景気に翳りがさし、工場経営は厳  
しくなる。大輔くんが小学校に入るところ、  
一家は工場の閉鎖を決め、浩行さんは東松  
島市の会社に勤めるようになる。

それぞれに性格が違い、けんかもするけ  
れど、浩行さんとひとみさんには、3人が  
大の仲よしに思えた。

二人が結婚したころ、浩行さんの父、浩  
さんは間垣の自宅のすぐ隣で、「大川電子」  
という電気部品の製造工場を経営していた。  
大手の電機メーカーに製品を納入し、多い  
ときは大川地区の女性たち100人ほどが  
働き、近所では200軒ほどの家庭が内職  
を行うという、地域の要だった。

祖父の浩さんには期待があったようだ。  
いつか大輔くんが工場を再開してくれたら  
——。新しい工場用地にと、近所に購入し  
ていた土地を、閉鎖した後も手放さずにいた。

麻里さんは、学校の劇などでいつも主役  
級を演じ、中学3年のときの文化祭では  
「ライオンキング」のテーマソングを英語で  
歌い上げ、「ジューピター」をバイオリンで演  
奏した。ピアノは習っていたが、家でバイ  
オリンを弾いたことはない。いつ練習した  
のか。「何にでも挑戦したい子なんだな」

初孫の誕生に、祖父の浩さんは喜んだ。  
盛大に「孫振る舞い」を催し、地域の人が

3人の子どもたちは不自由なく育って

それぞれ

## 明日の風

酷暑を迎え、4年  
前の夏を思う。女川  
湾の北岸へ注ぎ込む  
沢の周辺はうっそう  
として、蚊が群がっ

てくる。草むらで足をとら  
れて転ぶのも構わず歩き続  
ける母親は、ひとり息子を  
捜していた▼あの日、ほぼ  
10人に1人が犠牲になった  
女川町。その数字は、町を  
歩くうちに像を結ぶ。学校  
を訪ねると、教壇の先生は  
娘を亡くしており、教室に  
は父や母、弟妹の帰りを待  
つ生徒がいた。役場には家  
族を捜し続ける職員がいた。  
仮設の商店街でも▼女川原  
子力発電所の経済効果を知  
るため、老齢の元店主を  
訪ねて、原発の話を2時間  
余り教わった。いとまを告  
げた時、彼は大きな箱を取  
り出した。「ばあさんが泣い  
て泣いて飾れないので、見  
てもらえませんか」。黒髪の  
美しい女性がほほ笑む。ひ  
どり娘の遺影だった▼喪失  
感が満ちた町で、もうひと  
つの数字が像を結ぶ。県民  
の4人に1人が命を落とした  
という70年前の沖縄。広  
大な更地と化した三陸の浜  
辺に立ち、今なお米軍基地、

ひとみさんは誇らしかった。

高校では希望していた演劇部へ。学校近くに住む級友の家に遊びに行くと、友の母親の車いすを押すのを手伝った。

「やさしい子でした」。ずっと後になって、ひとみさんはその話を聞かされた。保育士を目指し、短大への進学も決まっていた。

あまり目立とうとしなかった理加さんは、どこかで姉へのあこがれがあったのかも知れない。中学3年の時の文化祭で副実行委員長を務め、みんなの前であいさつを述べた時、両親には少しづつ変わろうとしていくように思えた。高校の吹奏楽部でサクソスを演奏。楽器を持ち帰り、懸命に練習する姿はいまも記憶に残る。演奏会への出演を仕事で見に行けなかったのが、ひとみさんには悔やまれる。

料理が好きだった。高校に入ると、帰宅した浩行さんのため、仕事で遅いひとみさんに代わって夜食をつくる。オムレツが得意だった。

どこで習ったのか、炊飯器でチーズケーキを作ったことも。ボーイフレンドの家が飲食店をしていたこともあって、いつしか「管理栄養士になりたい」と言うようになる。福島県の学校への進学を、浩行さんに相談していたという。

大輔くんは小学3年からスポーツ少年団で柔道を始めた。大川中学校

の柔道場で週2回。はじめはいやがっていたが、練習を重ね、少しずつ強くなってきた。わんぱくで級友を泣かせては先生から注意の電話が入った。

春の運動会では、毎年、地区対抗のリーグの選手に選ばれ、6年生の時は1位に。その年、赤組の応援団長も務め、応援歌を歌い、「白」の牛乳を飲み干すパフォーマンスを披露。トロフィーをもらう写真がアルバムに残る。さまざまな行事を通じて、子どもたちは地域に育てられていた。

忘れられないのは、5年生の学習発表会で「はだしのゲン」の弟役を演じたことだ。のちに浩行さんは広島市を訪ね、原爆ドームを見たとき、大輔くんの姿を思い出して涙が止まらなくなった。

東日本大震災が起きた時、浩行さんは東



が、大輔くんの帰りを待っていたの

かも知れない。大輔くんは数百メートル離れた大川小学校で級友とともに犠牲になった。問垣の家並みは消え、今は住む人はいない。

## 地域のつながり

幼い3人が晴れ着姿で並ぶ写真がある。津波に襲われたひとみさんの実家でなんとか残っていた。父母の宝物だ。

今となれば、後悔は数知れない。いろいろな行事での姿を仕事で見られなかったのもそのひとつだが、子どもが最も成長する時期、親も忙しい。

葬儀の際、幼い子どもが母に連れられ、遺影に小さな手を合わせていた。麻里さんからよく遊んでもらっていたのだという。両親も気づかないところで、子どもたちは大人になっていた。

震災後、ひとみさんは車の中で「10円足りない」と記された大輔くん手書きの「借用書」を見つけた。学校近くの雑貨店で少年ジャンプを買うときに、お金が足りず、一筆書いて後で払ったらしい。町の人々の温かいつながりに子どもたちが育てられていたことを改めて感じる。

思い出されるのは震災の少し前のこと、理加さんがこんなことを口にした。「ねえ、こんなに幸せでいいのかなあ」。そしてこう続けた。「死にたくない……」

どんな意味を込めようとしたのかは分からない。でも、地域と家庭に育まれた幸せな日々の中に子どもたちがいたことは確かだ。二人はそう思う。

の轟音に耐えねばならない南国の喪失感の奥底を思う  
▼1945年4月1日に米軍は沖繩本島へ上陸。戦闘は住民を巻き込み、日本軍の牛島満司令官らが自決する6月23日まで続いた。当時の新聞は、「沖繩に輝く牛島部隊の偉功」(6月25日付朝日新聞1面)など政府の発表文しか伝えられず、失われた命を数えることも出来なかった▼7月に連合国側はドイツ首都郊外ポツダムでまとめた宣言を発表した。日本の新聞では、政府の統制下、「国民の戦意を低下させるおそれのある二カ所が削除された」(朝日新聞社史)。それは、武装解除後の軍隊は家庭に復帰して平和的生活を営む機会が与えられるといった部分と、日本人を民族として奴隷化し国民として滅亡させようとするものではないという部分だった▼8月6日に広島9日に長崎へ原爆投下。その後には日本はポツダム宣言を受諾し、戦争は終わる。伝えていたなら、知っていたなら、救えた命があったかもしれない。夏の空に誓う。伝えるべきを伝えよう。

# 雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの  
雄勝病院の話から始めよう。

【第9回】

## 「ちよつと寒いね」栄養士は笑顔で

西北西の風が強まる中、津波は勢いをゆるめず、町の中心街へ押し寄せた。

2011年3月11日の午後3時20分すぎだ。

波は、3階建ての病院を越え、屋上の職員と患者を押し流した。

当時22歳だった女性栄養士、Bさんの証言を記す。

本館屋上に達した最初の波は、胸元にとどまったが、次の波は一気に人々をのみこんだ。

次々に押し寄せる材木や梁につかまる。ザブンザブンと波音がして、そこここに声が交じる。

沖を向いて漂うBさんは背後に、自分の名を呼ぶ、なつかしい声を聞いた。肩越しに伝えた。

「あ、弘江さーん。大丈夫ですかー」

先輩の主任栄養士、佐々木弘江さん(当時42)が彼女を呼んだのだ。山を向いて何かにつかまる佐々木さんも、肩越しにBさんを見ながら言った。

「うーん。がんばろうねー」

佐々木さんは、職場で見せる

いつもの笑顔を返しながら、もう一言、つづけた。

「ちよつと寒いねー」

とてつもなく寒いのに……。

先輩は、後輩のためにいつもと変わらないユーモアを返す。

雄勝湾から約12キロ南、石巻市の気象観測所が午後4時に

## 「夏なら海水浴だ」薬剤師にも笑み

Bさんが向き直ると、約2メートル離れて同じく沖を向いて漂う主任薬剤師の鈴木一男さん(当時43)も言った。

「がんばれなー」

さらに鈴木さんもつづけた。

「だけど、夏だったら、よかったね。そうだったら、海水浴だったのにね。気持ちよかったのにね」

とてもやわらかい口調だった。顔には笑みも浮かべていた。大変な緊張感も伝わってくるが、年下のBさんをなごませようという思いも伝わってきた。

厳寒の海の中。鈴木さんたちと一緒にいた時、Bさんには寒

記録した気温は0・4度だった。

2人の距離は20メートルほど。茶色のダウンジャケットを着ていた先輩に、後輩は言った。

「ダウン、ぬいだほうがいいですよー」

佐々木さんは、言葉を返さず、肩越しに笑顔を返した。

それが、後輩が先輩を見た最後だった。

いという感情が出てこなかった。必死ではあったが、焦る気持ちもなかった。あまりの異常事態におかしくなっていたのか、「これからどうしようかな」と軽く言えるような感覚だった。

鈴木さんの隣には薬剤助手の女性(当時37)、そして彼女

の隣には、Bさんに屋上への避難を指示してく

れた看護師(当時54)がいた。

互いに3メートル前後離れていた。

薬剤助手は声を発しなかった。慌てた様子でもない。ただ、ぼうぜんとしていたようだった。

看護師はひどく慌てていた。

叫ぶのではないが、大きな声で繰り返して「泳げないから。助けて」と訴えていた。が、そこま

で誰もたどりつけない。それぞれ、木切れにつかまり、それが沈めば、タイヤにつかま

る。それも沈めば丸太に。手の届く距離に次々流れてくる。

鈴木さんが、Bさんたち3人に大声で指示を出し、励ます。

「あれにつかまれー。大丈夫だからー」

浮き球がついた養殖のロープが流れてきた。鈴木さんが声を上げた。「あれだったら沈まな

いから、あれにつかまれー」

波が高まつてきた。鈴木さんは流れ

てきた屋根に移った。

それを見てBさんは安心した。

彼女自身はそこまで行けない。鈴木さんは彼女に言った。

「がんばれなー」

「はい」

Bさんは手をふった。

ロープにつかまりながら、何度も波をかぶる。こらえる。左手がロープにとられた。

どんどん沈んでいく。

(このまま沈んだら終わりだ) 渾身の力で左腕をひきぬいた。痛みはないが、出血している。

(まず生きていかならぬ) 体は浮いた。周囲は漂流物だらけ。人影は見当たらなかった。

(そろそろ日が暮れるかも) 西の山へ目を向けると、屋根

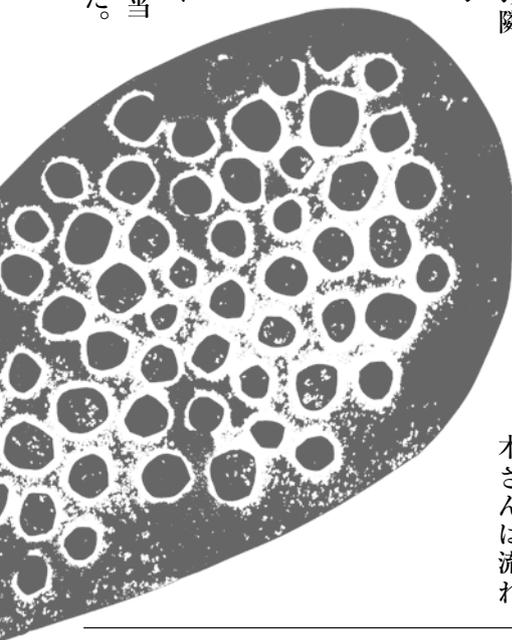
が流れてきた。歩くほどのスピードで近づいてくる。その上

のほり、体育座りする。体はガタガタ震える。歯も鳴る。止めようもなく、カスター

ネットのように鳴りつづけた。午後6時の気温は零下0・2度。翌朝8時まで氷点下の寒さがつづく。

発泡スチロールの箱が入った袋がいくつか流れてきた。頭にかぶり、体の脇に敷き、降る雪をよけた。(寝たらだめなんだ)と自分に言い聞かせた。睡魔に襲われることはなかった。

へ



==== 女川町議会 福島を視察⑨ =====

## 高線量いつの時点で 「のちに分かったのです」

女川町議会は2014年7月、福島県の福島第一原発事故の被災地を視察した。初日に訪ねたのは浪江町。今も全町避難中だ。原発は隣の大熊町と双葉町に立つ。震災直後の約3日間、町はテレビ情報を元に役場から約30キロ西の地区へ避難していた。

女川町議の阿部律子氏(59)が尋ねた。「いつの時点でその地区が大変な所だとわかったのですか」。浪江町議たちは次々と言葉を返してきた。「政府からも東京電力からも連絡は来ない。1万人以上の町民が集まって。少ない米を集めて炊き出しやって、子どもたちがおにぎりを食べている外でね。のちに分かったのです。毎時300前後のマイクロシーベルトだった」。放射線量のあまりの高さに「おお」と女川町議らはうめいた。

阿部氏は振り返る。「原発があろうとなかろうと、事故が起きれば被害の差はないが、情報の差はあまりに大きい」

共産党の町議だ。震災前は、女川原発の廃炉を唱えるより、事故のないよう監視することに徹していた。事故は防げるという「安全神話」が自分にもあったかもしれない、と今は思う。

震災時、女川原発を襲ったのは「震度6弱」の揺れ。「6強」でも「7」でもなかった。だが火災が起き、損傷した。「原発はどこで動かしても危険だと言わざるをえない」とつくづく思った。

震災時に約1万人だった女川町の人口は今、7千人を切った。原発なしに町は成り立たないという声に、こう反論する。

「原発があるのは、宮城県では女川町と石巻市だけ。全国でも原発のない町はいっぱいあるでしょ。みんな、それぞれの身の丈に合った財政運営をやっているでしょ。原発のお金がなければやっていけないという考え自体、変えなければ」

人々は、自分自身が被害に遭わなければ福島のことを自分のことに出来ないのかな……と嘆息する。

女川原発の再稼働に反対する。震災後に女川町内で反対の署名を募って歩いた。「県に出すなら書ける。町に提出するのなら書けない」と断る人もいた。無記名の住民投票を実現し、町の人々の真意をくみとりたいと願う。

## さびついた釜に思い出はあふれて

空腹と渴きを感じていた。流れてきたカップ麺を拾い上げ、かじつてみた。渴きが増した。漂流物がたまったところへ屋根が傾き、ガガガと音を立てた。(沈んでも仕方ない)。覚悟を固めたが、沈まなかった。

夜は長かった。もう明けないのかとさえ思えた。

ようやく訪れた朝。「おい」と声を上げてみた。何も返ってこない。(え。私だけ。なんで)。驚いたが、皆も助かっているだろうと思つた。漂流物が海面を埋め尽くしていた。

内をぐるぐると回っていた。岸辺に人影が見えた。声が出せず、負傷した左腕も動かせず、右手で発泡スチロールをふつた。「人がいるっ」。気づいてもらえた。病院から海岸伝いに約6キロ先の水浜だ。陸橋から女性3人が声をかけつけてくれた。まもなく軽トラックが見えた。男性が降りてきて叫んだ。「屋根だと危ないから、船に移れないか」。近くを小船が漂っていた。サブンと海に入った。ヒーツと叫びたいほどの水の冷たさだ。1メートルほど泳いで船へ。船べりは約80センチの高さがあり、のぼれない。足場を探し、周囲を泳ぐと、畳が浮いていた。そ

このぼろろにも畳も沈む。長時間かかった気がする。やっと畳にはいがあり、そこから船へ。岸から漂流物をかきわけ、もう1隻やってきた。「大丈夫か」

「ありがとうございます」

しゃがんで動けない。毛布にくるまれて軽トラックの助手席へ。自分は泥だらけだ。

「すみません、汚れますね」

「何も何も」

手足は腫れ上がり、しわ一つない。(クリームパンのよう)。避難所で12時間近く眠り込んだ。

11年12月。Bさんは初めて病院へ足を運んだ。廃墟のような本館1階の厨房に、うどんをゆでる回転釜がさびたまま、残っていた。佐々木さんが何度も磨いて大事に使っていたものだ。

厨房脇の

事務室に入った。

机が二つ並んでいた小さな部屋。

佐々木さんとは偶然にも同じ短大卒。肩を並べて座った。右

を見れば、先輩がいて、その後ろに窓。先輩の弘江さんのお

しゃべりは楽しくて止まらない

が、光がまぶしい。その表情に

弘江さんは笑って言った。

「逆光だよ。でも、あえてカーテンはしめないから」

日の光はおしゃべりを止めるのに、ちょうどいい。

空調のない事務室は、冬は寒く、夏は暑かった。笑いが絶えなかつた厨房。夏、開放した窓から、隣の診察室へ響くらしい。

「聴診器の音が聞こえない」と鈴木孝壽副院長(当時58)が怒つたように言いに来て、

こう言い足す。「騒いで

もいいから、今日はニン

ジンを入れるな」

10年夏、窓にすだれをつけて

もらった。そこへ小鳥が止まる。

でも、後輩は鳥が苦手。ある日、

弘江さんは外からそつと窓辺に

近づくと「わーっ」。突然の大

声に小鳥も後輩もびつくり。

笑顔で戻ってきた弘江さん。

「これでもう来ないから」

「弘江さん、診察室に患者さん

いますよ」

「あ、そうだ、そうだ」

楽しかった夏の日。思い出が

あふれる。初めて泣いた。